

特集企画「至高の饗宴～伊万里鍋島焼×輪島塗～」より



鍋島焼・巒山窯



輪島塗・輪島キリモト



現代的な漆器。「宇宙」(蒔絵) (右)
「網目に小花」(沈金) (左)

特集企画「美々しき器たち～ハンドメイドの世界～」より



「インペリアル ポーセリン」(ロシア)
ロシア皇帝専属窯として創立。代表的な
「コバルトネット」シリーズ



「ジャン」(フランス) ジャポニズムを代表する
シリーズ「ビヴォアン」の誕生 140 周年を記念
して誕生した「ビヴォアン・ブルー」シリーズ



「ニュンヘンブルグ」(ドイツ) 創業当時・
260 年前の技法を現在も保ち、すべて手
作業で製作

第 25 回 テーブルウェア大賞～優しい食空間コンテスト～

部門 1：テーブルウェア・
オリジナルデザイン部門
大賞・経済産業大臣賞
「神代の器」田中陽三 ×
芦田俊一
儀式にも使われそうな神
秘的な造形。



部門 2：テーブルウェア・
コーディネート部門
大賞・経済産業大臣賞
「博士の愛したディナー」
松下葉子
化学の構造式の六角形モ
チーフが軽やかな印象。

第 25 回テーブルウェア大賞

食卓を彩るテーブルウェアの新しい提案と、日本の食文化の発展への寄与をコンセプトとした「第 25 回テーブルウェア大賞～優しい食空間コンテスト～」。

部門 1「テーブルウェア・オリジナルデザイン部門」は、食器のオリジナルデザインを対象とし、部門 2「テーブルウェア・コーディネート部門」は、和洋を問わずオリジナリティあふれる食卓のコーディネートを対象としたコンテストとなっている。部門 2 の今年のテーマは「Enjoy Home Party ～ハッピーアニバーサリー」。ほかにテーブルセッティングのみを審査対象とした、特別審査部門がある。

会場には、応募 1724 点から 1 次審査通過作品の 174 点が展示された。各部門の大賞を紹介する。

●部門 1：テーブルウェア・オリジナルデザイン部門

大賞・経済産業大臣賞

「神代の器」田中陽三 × 芦田俊一

推薦コメント：一千年以上土の中に埋もれていた樺材をシャープな船型の形に彫り込む。神代樺の空目を活かす為は何層にも漆を拭き漆とし、柔らかな質感にまとめる。底の造りも実に丁寧であり、漆の艶が存在感を高め、造形としても美を感じさせる。この器には何が盛られて使われるのであろうか。格調の高さを感じさせる優品である。(三田村有純 審査員長)

●部門 2：テーブルウェア・コーディネート部門

大賞・経済産業大臣賞

「博士の愛したディナー」松下葉子

推薦コメント：タイトルとコンセプトとコーディネートがぴたりと合い、楽しくハッピーな気持ちになる食卓です。創造性が素晴らしく、還暦にふさわしいカラーコーディネートと空間デザイン。器のレベルも高く、お料理も分子料理でまさに科学者の食卓です。内助の功でご主人様の将来はノーベル賞でしょうか。(落合なお子 審査員)

テーブルセッティング～食空間提案～



加藤タキ



黒柳徹子／田川啓二



田川啓二（ビーズ作品）



ケイ山田



東儀秀樹



花房晴美



原田知世



余貴美子



テーブルウェア・コンセプトや思いなどが綴られたパネルが設置されている。

テーブルセッティング～食空間提案～

昨年に引き続き、各界の著名人による「おもてなしの食空間」をテーブルセッティングとともに紹介する企画。流行を取り入れつつも、シチュエーションの細部まで配慮され、個性が溢れるテーブルセッティングはさすが。来場者は新鮮な驚きとともに熱心に見入っていた。

◆加藤タキ（コーディネーター）

「いまは天国にいる大好きな2人を招いて～母・加藤シズエと親愛なるオードリー・ヘップバーンさん」

◆黒柳徹子（女優・ユニセフ親善大使）／田川啓二（ビーズ刺繍デザイナー・文化学園大学特任教授）

「FLOWERS／花たち」

◆ケイ山田（英国園芸研究家）「ハッピーバースディ・キッズ」

◆東儀秀樹（雅楽師）

「…音楽は言葉以上に人と人をつなげます。いろいろな個性が食卓を囲んで楽しさを共有する。そんな空気と音楽を重ねてみました。（紹介文より抜粋）」

◆花房晴美（ピアニスト）「ピアニストの食卓」

◆原田知世（女優・歌手）「レモンの実る嬉しい頃」

◆余貴美子（女優）「太陽や、風や、鳥の囀り、植物の薫りを感じながら食事とちょこっとお酒！」（以上、敬称略）

日本の器を訪ねて／注目した作品より



紅型技法を取り入れた陶器。atelier+shop COCOCO ヨコイマサシ（日本の器を訪ねて／沖縄県）



グラデーションが美しい。瀬戸焼 窯元 SAMS（展示販売コーナー）



硝子釉で菊ヶ浜を表現。萩焼共同組合〈あらせ・天龍窯〉（展示販売コーナー）



彩泥釉盛線文組盛器「○・△・□」藤澤徳雄 禅の考えによる万物の基本、○△□の形をイメージ。（テーブルウェア大賞部門1）



鮮やかな黄色が魅力的。Wald Von Gelben Stern（'黄色い星'の森）鳥居あい（日本の器を訪ねて／常滑焼）



沖縄ならではのモチーフが描かれた漆器。角萬漆器（日本の器を訪ねて／沖縄県）



様々な色と形に収集欲をそそられる有田焼の豆皿。（日本の器を訪ねて／有田焼）



「窯元のおもてなし『どんぶり百撰』」（日本の器を訪ねて／美濃焼・土岐市）



「わたしの逸品 まいにちの逸品」（日本の器を訪ねて／多治見）

日本の器を訪ねて／展示販売コーナー

日本の器の産地8団体（会津、美濃焼・土岐市、瀬戸織部、多治見、常滑焼、有田焼、波佐見焼、沖縄県）が出展し、それぞれの特徴を打ち出していた。美濃焼・土岐市のどんぶり、常滑焼の急須など、テーマを絞ると、アピールしやすいと感じた。展示販売コーナーでは、全国の窯元や作家や、テーブルウェア関連の店が200近く出展。

平面的な器を中心に、若手作家の作品や、釉薬の表現が美しいものなど、会場内で印象に残った作品をご紹介します。

■「テーブルウェア・フェスティバル」問合せ先

東京ドームシティわくわくダイヤル

TEL 03-5800-9999

<https://www.tokyo-dome.co.jp/tableware/>

近未来をリードする若い表現者たちの アート&デザインワーク!?

第65回 東京藝術大学卒業・修了作品展から



鈴木智亜貴「ヨフヨフ」[陶芸 / 修士] (正木記念館) * 陶板による立体作品



相川くるみ「ずっとずっと昔」[陶芸 / 修士] (大学美術館地下2階展示室)



中島雄里「あすかかぜ」[陶芸 / 修士] (大学美術館地下2階展示室)

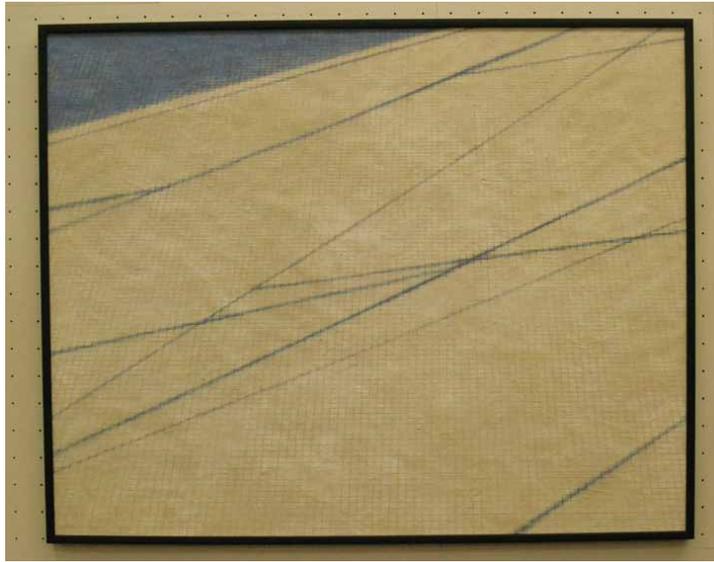
先の1月26日～31日まで、東京藝術大学美術学部の学部卒業生ならびに大学院修了生による「第65回東京藝術大学卒業・修了作品展」が大学構内および東京藝術大学大学美術館、東京都美術館において開催された。

大学における創作活動の集大成として毎年、盛況のうちに開催される作品発表の場として今回も美術学部全科が上野の森の学び舎に一堂に会し、絵画棟や美術館、正木記念館・陳列館・アトリエのほか、学内外の特徴的なスペースや屋外ロケーションを活用しながら、見応えのある展観が構成された。

展覧会を通して実感されるのは、東京藝大の恵まれた

制作・研究環境とそこで時代の息吹をまといながら自由に創作表現に取り組める卒業生・修了生たちの質の高い成果（作品）であり、そこにこれからの時代を牽引する兆しを感じ取ることができる。そうしたインパクトのある多彩な作品のなかから、タイルの未来を模索するうえで、たいへん興味深い陶芸・絵画・デザイン・先端表現などの作品をいくつかセレクトしてご紹介する。

東京藝大美術学部・学科の梗概を参考にしながら、おそらく近い将来のアートシーンで活躍するであろう若き表現者たちの未来を感じさせる美の競演〈アート&デザインワーク〉の一端にふれていただきたい。



佐藤果林「contrast」[日本画/学部] (東京都美術館 展示室) *外壁タイルを主題に



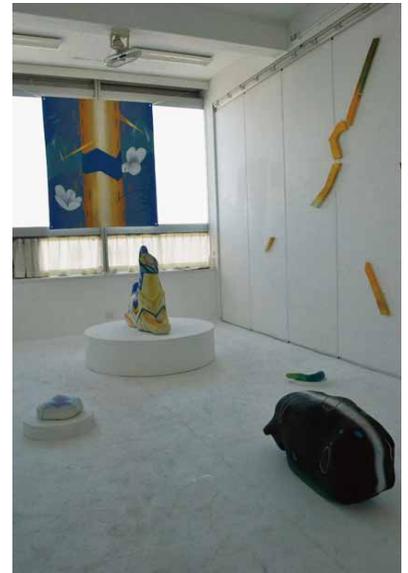
舟越観月「カレイドスコープの箱庭」[日本画/学部] (東京都美術館 展示室)



中沢悠華子「たいせつなものはいつか」[壁画第二研究室/修士] (大学美術館 3階 展示室)



張 源之「無風 漣漪」[壁画第二研究室/修士] (絵画棟 1階)



大西利佳「万物に宿る」[壁画第二研究室/修士] (絵画棟 7階)



春木 聡「RIY(2014)」[油画/修士] (絵画棟 1階)



* Repair It Yourself の略で基礎工事に用いられる建材用の栗石を壊し修復するという表現

東京藝術大学美術学部絵画科 (油画)

美術学部油画は1・2年次の基礎課程と3・4年次の専門課程で構成されており、絵画造形全般の基礎としての素描(ドローイング)から、専門領域である油画実技まで様々なメディアの体験を通して、絵画表現と絵画から派生する幅広い表現を学ぶ。

大学院においては、油画、版画、壁画、油画技法・材料、合計13の研究室が設置され、学生の研究テーマと各研究室の専門性により各自の研究・制作に合わせて、それぞれの研究室の特質を生かした大学院教育と研究が行われている。壁画第二研究室では、フレスコ、モザイク、スタンドグラスなど伝統的な壁画表現の技法を学ぶ。

東京藝術大学美術学部絵画科 (日本画)

絵画科日本画専攻における教育研究は、現代絵画としての創造性の追求と同時に、わが国美術の伝統技術・精神を継承し、これを発展させることを主軸に据える。

東京藝術大学美術学部工芸科

1889(明治22)年に開校した東京美術学校の専修科美術工芸(金工・漆工)として始まった工芸科は、1975(昭和50)年に組織を改めて、彫金・鍛金・鋳金・漆芸・陶芸・染織の基礎及び専門課程となった。その後1995(平成7)年に木工芸、2005(平成17)年にガラス造形を大学院に開設。学部は6専攻、大学院は14の研究室からなり、



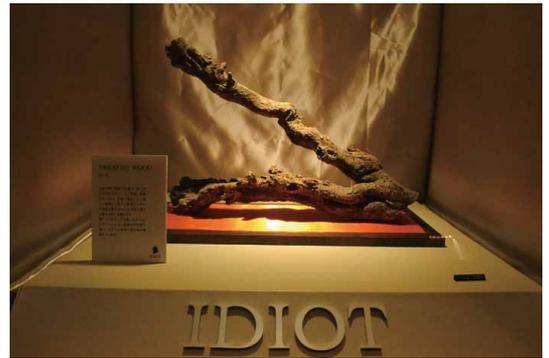
河本匠真「フェノグラフ PHENOGRAPH1」[デザイン/修士] (大学美術館 3階 展示室)



*陶器をベースに再現性のある模様で制作した豆皿、カップ、石をモチーフにしたカタチで制作したテストピースなど。同じ形でも一つ一つ違う模様を生み出す制作工程をつくることで、そこに大量生産品にはない愛着を生むことができる。



山田 愛「身体をなくしたモノが、ここに在るために、」[先端芸術表現/修士] (絵画棟 1階)
*石の表現



大山大介「DECAYED WOOD 朽ち木」[デザイン/修士] (大学美術館 3階 展示室)

*上野の森の肥沃な土壌で長い時間をかけてゆっくりと形成、熟成された朽ち木。凜とした佇まいや力強い枝ぶりはオブジェとしても独特な存在感を放つ。

学生の学びたい専門領域で、深く研究し自由に資質を伸ばしていける体制をとっている。

陶芸

工芸的感性、実用（伝統工芸）だけの教育でなく、工芸と彫刻など芸術性を意識しながら制作し、自分の発想を工芸制作の中に表現し、芸術的に高める教育を目標とする。陶芸実技全般にわたる制作、施釉、焼成法に対処できる教育環境を整え、物を作ることによってさまざまな経験を積み重ね、陶芸の実制作に対処できる人材を育成する。

東京藝術大学美術学部先端芸術表現科

1999(平成 11)年に設置された先端芸術表現科は、「美術」の分野を超える教育研究の実践を目指す。従来の藝大・美大では、扱う技法によって各科が編成されてきたが、先端芸術表現科では、芸術の持つ意味そのものを「表現の問題」として問いかける。

大学院美術研究科先端芸術表現専攻

2003(平成 15)年度より修士課程、2005年度から博士課程がスタート。大学院では学内に止まらず、学外の研究機関や NPO、行政や産業との共同体制を組織し、そこで実践される「プロジェクト」は、激しく揺れ動く現実社会と切り結ぶ問題に取り組み成果を上げてきた。表現の歴史を新たな視点で見直すとともに、表現の未来とその可能性を探求する。

東京藝術大学美術学部デザイン科

教育研究体制としては、10の研究室が専門領域として独立しつつ並列し、共通領域として「視覚」「空間」「機能」の3つのグループを構成。また、共通基盤として「環境・設計」「映像・画像」「描画・装飾」の3研究室を設置している。学部教育、大学院教育とも各研究室、グループの特質を充分活かし、学生が既存の領域にとらわれることなく自由に資質が伸ばしていけるように配慮されカリキュラムが編成される。

タイルアート・レポート

近代日本の陶磁器産業のなかでの 建築タイルの位置づけ

松濤美術館「セラミックス・ジャパン—陶磁器でたどる日本のモダン」から



淡陶、佐治タイル、佐藤化粧煉瓦などの《室内装飾タイル》[20世紀前期]

バーナード・リーチ《生命の樹》1928年 京都国立近代美術館蔵

京都の陶磁器試験所等で制作された《美術タイル》[20世紀前期]

1月29日まで渋谷区立松濤美術館で開催された「セラミックス・ジャパン」は、「近代日本の陶磁器デザインを概観する初めての展覧会」と位置づけられ、明治維新から第二次世界大戦までの約70年におよぶ、近代日本陶磁器の創意にあふれたデザインの流れを161件の出品作で通覧するものとなった。そのなかで近代建築を彩った日本の国産タイルも一部に展示され、見ごたえのある展示空間を楽しむことができた。

万国博覧会への出品によるジャポニスムの時代、アール・ヌーヴォー全盛の時代、そして陶磁器試験場等の技術と意匠（図案）開発によって発展する大正から昭和に至る時代など、工業化と陶磁器産業の変遷がつかめるような展示であったと思う。

会期中の1月15日には、「デザインありてこそ—焼物から窯業へ」と題した講演会が開催され、この展覧会を監修した森仁史氏（金沢美術工芸大学 柳宗理記念デザイン研究所）から展覧会の趣旨説明がなされ、陶芸（窯業）の発展と軌を一にするように伸長してきたタイル産業との関係も考えさせられる興味深いものだった。松濤美術館の特徴ある建物とともに、図録よりその展観の一端をご紹介して話題提供としたい。

展覧会の趣旨（美術館サイトより）

ジャポニスムで迎えられた近代日本の陶磁器は、世界に誇る品質とデザインでした。各製陶所や試験場での新展開により万博などで好評を博するとともに、和洋食器、建築タイルや照明器具などに新感覚が息づく一方で、板谷波山らの豊かな個性が開花していきました。技術革新

と新しいデザイン手法を獲得し、量産製品の世界的流通に至る、創意とエネルギーにあふれた近代日本陶磁器づくりを見ることのできる初めての機会。



渋谷区立松濤美術館正面入口

■渋谷区立松濤美術館・建築概要

当初の基本設計では、外壁には白レンガのような恵那錆石を使い、欧州のシャトー風で建物自体が美術品ともいわれる意匠がめざされた。建物の中央は地下2階から屋上まで大きな吹抜け（地下2階部分は噴水のある池）で、どのフロアもそこから採光できる仕組み。その後、外壁に使われる恵那錆石は地味で錆色が濃く暗い感じがすることから、もう少し明るいピンク色の花崗岩を使用することになったという。

所在 東京都渋谷区松濤 2-14-14

構造 鉄筋コンクリート造、地上2階地下2階建

開館 昭和56（1981）年10月1日

設計 白井晟一研究所

建築工事 (株)竹中工務店東京支店